

広い視野と人脈を得た1年間

第二期生 上門 充（京都第一赤十字病院 地域医療連携室 課長）

履修を決めたときの私は、担当していた地域医療連携と災害救護事業で多くの課題を抱えて悩んでいました。きつと、働きながら大学に通う大変さや不安以上に、「安寧の都市ユニットで学びたい」という気持ちが強かったのだと思います。

その後、履修が決定し、4月からの新しい生活に思いをはせていた矢先に東日本大震災が起きました。DMAT(災害派遣医療チーム)だった私は、発災直後に現場に派遣され、職場に戻ってからも実務に忙殺されることになってしまいました。

出鼻をくじかれたかたちで始まった安寧の都市ユニットの履修ですが、東日本大震災直後だからこそ、有意義だったこともあります。

それは、災害医療、初動救護の視点だけでは解決できない大規模災害現場を目の当たりしたあと、各分野の先生方や受講生の活動報告を聞き、意見交換をするなかで、多様な視点(考え方)の大切さを実感できたことです。

「視点を変えて考える」ことの重要性はわかっている、自分の経験や考え方に邪魔をされていましたが、(ビジネスの場ではなく)学びの場で異業種交流ができたことにより、変わっていく自分を感じることができました。履修後も、違う分野で活動しているみなさまのお考えを直接に聞ける環境にあることが、私の財産になっています。

これからも本ユニットでの経験をいかし、特定の分野にとらわれることなく、多様な分野で活動しながら、「安寧の都市」の実現をめざしていきたいと考えています。

安寧の都市クリエイターを志す社会人として

第二期生 瀧口 康司（西日本電信電話株式会社）

安寧の都市ユニットでは、毎週水曜日の工学研究科拠点(桂)、医学研究科拠点(吉田)での履修に加えて、土井勉先生主催のフィールド学習で現地(神戸松本せせらぎ通り、大阪からほり〜北浜テラス等)におもむき、安寧の都市について考え、体得することができた。

実践プロジェクトでは、クライシスマネジメントチームに所属した。三谷智子先生、小山真紀先生、孔相権先生、今村行雄先生、村上由希先生、前期までは第一期生の先輩(大田さん、濱田さん、古橋さん)と、同期メンバー(上門さん、弓岡さん、米澤さん)で、各自の取り組みと、なによりも熱い思いをもち寄った。先生や先輩からの助言、メンバーとのディスカッション、執筆活動を通じて、毎週土曜日は、杉浦地域医療研究センター1階の教員居室で、充実した「クライシス